

MASセミナー 第11回

「日本の街並みはなぜ美しいか」 その7

「暮らしから街並みを考える」

2013.07.06(土) PM1:30~
JIA建築家クラブにて



建築の歴史を学ぶ！

日本建築家協会 関東甲信越支部 港地域会

オハジキという名の都市

現代の子供たちはオハジキという遊びをご存知か？

今この言葉は大人たちの中では恐ろしい言葉としての感があります。会社から突然はじきだされる、また、住まう環境でなくなった都心の家には居られない。古い住人が出て行った多少なりともまとまった跡地はせめて町並みとしてはよくなるのか？ 拡張された道路、林立するマンション、なんの脈絡も感じられない数棟の建て売り住宅、都心の古い町は多かれ少なかれこんな状況になっています。町という概念に理想がない現代であればこそ、その根底にある住まいとしての住居をまず建築家とつくるべきときと言わずにいられません。



今井 均

アジアからの脱出を求めたのか

特に戦後を意識すると、日本の街並を壊した者は次の4者である。

- 1・生産と消費の拡大再生産こそ国力と考えた製造業者と建設業者
- 2・安全と防災だけに重点を置き、拡大再生産をサポートした行政官僚
- 3・官僚に教わらないと企画が立てられない文化認識の無い政治家
- 4・貧しさから抜け出る途としてスクラップ&ビルドを容認した国民

わかるようにそれぞれはあるグループ集団であったり全体であったりする。ここには全体として、日々の暮らしにあって日本の伝統文化を評価せず、そこからの無方向的で審美観のない開発を受け入れる国民性があつた。



大倉 富美雄

超高層マンションに「暮らし」はあるか？

私たち人類(ヒト)が(サルとわかれ)誕生したのは200~300万年前、その後、何百万年の間、私たちは平面(地面)で暮らしてきました。その平面から離れて立面(上空)で暮らすようになったのはここ200~300年、まして超高層を居住空間としてとらえるのはここ100年に満たない歴史の中です。

何百万年の暮らしの中で人間に組み込まれた感覚がたかだか万分の一の時の流れのなかでおいそれとすり替わるはずがないのは当然のこと。

上下の位置関係でコミュニティができづらいのは上のことと少なからぬ関係があるのではないかと思ひ、そんな視点から街並みと暮らしを考えます。

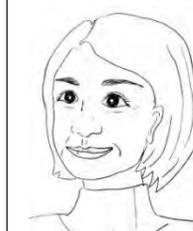


鈴木 理巳

住む人と社会とのコミュニケーション

家を設計するときに、建て主さんに、「防犯性、プライバシーを重視すると、街並みがさびしくなりますよね。」という話をよくします。外に向かってさりげなく生活の気配を感じさせる家は、「ともしび」のように、街を歩く人の心をあたためます。

そして、オープンな家のほうが、防犯上も実は安全だと感じています。街並みとは住む人と社会とのコミュニケーションです。生活する人たちが日々の暮らしを大切に、その様子を外に向かって演出することが魅力的な街並みをつくるのだと思います。



田口 知子



街並みの楽しみ

「散歩」は楽しい。街を散策することで何かを見つけ気分がリフレッシュすることがある。子供の笑顔、小さな草花を見つけただけでも明日への希望が生まれる。

街並みの楽しみとは人の笑顔や身近な自然を発見すること。

人々の暮らしが街に現れることが大切だ。街を飾る意識が、暮らし、街並みを変える。戸建て住宅でも高層マンションでも、意識さえすれば街並みを変えることはできる。皆さんも街並みを飾ることを意識してみませんか。



田中 俊行



宮田 多津夫



あいまいな領域と暮らし

人を取り囲む領域の本質は暮らしに現れる。かつての大家族は、互いの思いやりと御近所コミュニケーションが存在していた。しかし戦後日本の都には企業が集中し、働く場と暮らしは分断した。大家族は核家族と化し、今や単身世帯が37%を超えようとしている。曖昧な領域を共有して素敵に存在してきた街並みは、個の社会に移行し崩壊の危機にある。ここに何か仕掛けができないか？ 現代の大きな課題である。



村上 晶子

生活の表出が、地域特性を感じる街を創る

なぜ、どこに行っても同じような街並になってしまったのだろう。その1つの原因は、各住戸の生活感、暮らしが外に表れることが少なくなったしまったことだ。高い塀が家を囲み、道と家との関係が切れてしまった。英国では塀は低く前庭は半公的な場として街並みに寄与している。そう言えば、昔は各住戸の塀は無く、あっても生垣程度であり、隣の様子も感じられ、結果、地域特性が表出していた。

現代社会の中で、そこまでは無理としても、会話が発生するような、つまり暮らしが生まれるような関係性が、今、必要とされている。



連 健夫
(むらじ たけお)